

# 暗闇の豪雨にうたれて

中島 秀一 (1970太陽)

第二接触10分ほど前から降り出した雨はしだいに強くなり、部分食撮影を中断した。

そして皆既が始まった。今回で、四度目の皆既日食遠征。今回はかなり暗くなるだろうとある程度内心期待していたが、これほどの暗闇となるとは思わなかった。おまけに、初経験の雨。そして、豪雨。完全な暗闇の中、折りたたみ傘をさし、立ち尽くす外なすすべも無し。シャツ・ズボン・靴もずぶ濡れになり豪雨の中で6分間をすごした。

機材の紹介：

光学系A: miniBORG60 + 1.4倍  
テレコンバータ (f455mm

F7.6)、SONY α 100

NDフィルタはD4およびD1を用意。  
(鏡筒前に装着)

光学系B: Nikonフィールド  
スコープ + カメラアタッチ  
メント (f800mm F13.3)、

NikonF3

架台: A、Bともに赤道儀 (JSO製) に同架、自動追尾 (単二乾電池4本使用)

光学系Aにては、第1接触から第4接触までの全撮影を目的とした。

光学系BはフジクロームAS-TIA (ISO100 36EX) を準備。

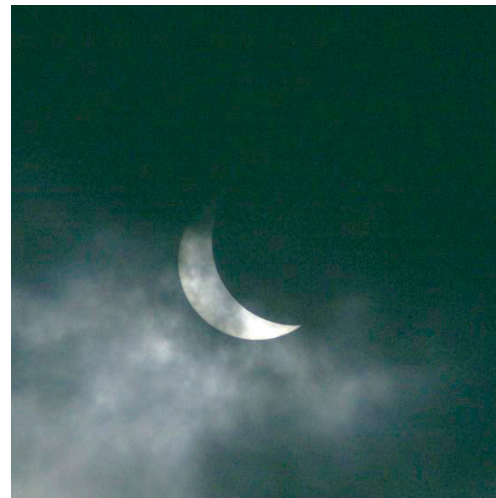
エコノミークラスで預けられる荷物の重量は20KGとのことで、利用するAIR CHINAは、重量についてかなりシビアとJTBのスタッフからの忠告をいただいた。

5月6月と二回の太陽撮影のリハーサルをし必要最小限の装備となった。カメラ2台とレンズ系2本は肩に担いで機内持ち込み手荷物としたが、それでも預け荷物は24KGとなってしまった。チェックインで

重量オーバー分の支払いを覚悟したが、往復とも支払い無しで済んだことは幸いであった。

機材重量が増えた原因は二つの光学系であることと、赤道儀の持込にあった。過去3回の海外遠征では、ジッツオ三脚にビクセンの微動雲台を組み合わせた簡易赤道儀でスチル写真を撮影してきたが、今回は皆既中の月面撮影を主目的としたため、長時間露出が可能なシステムが必要であった。じつはこの考え、(株)五藤光学研究所の2009年カレンダー6月号に掲載されたHartwig Luethen氏の写真に影響されたもの。1981年のシベリア遠

征の報告書で使われた「黒い太陽」とは、本当は太陽に向けた月の背中。言い直せば新月の月面撮影ということ。準備万全で臨み、上海郊外までやってきたものの、日食前日はかんかん照りの晴天で腕も顔もリハーサル焼けになってしまったにもかかわらず、どうした事か。当日は曇天→豪雨となってしまった。そして、予期せぬ宇宙ならぬ雨中の闇を初体験することになった。したがって、新月の月面撮影計画は次回の皆既まで延期となった。



左：第二接触まで、もう少しのところだったが、厚い雲がやってきて、...  
(09h17m)

下：日食前日のリハーサル時のスナップ。  
写真左より、佐藤さん、伊藤さん親子、そして、私の機材)

